聖隷学園報
一三

国際交流活動に新たな期待

創立20周年記念米国研修旅行

一行20名がキャマス訪問

サンフランシスコ市庁舎前にて

交流を深めたキャマス関係者

本学の国際交流活動は今年で六年めを迎える。姉妹校関係にあるアメリカワシントン州キャマス高校との交流を主とした高校生の米国研修旅行も五回を数え、両校の友情の絆は年々深まってきている。

昨年は国際コースの生徒がキャマス高校に三名、エルマ高校に一名それぞれ一年間留学（昭和五十九年六月～六十年八月）に出ている。今年もキャマス高校を中心に、エルマ高校及びワシントン州シェヘリスにあるW・F・WEST高校に留学生を五名送り出している。（昭和六十年八月～六十一年六月）

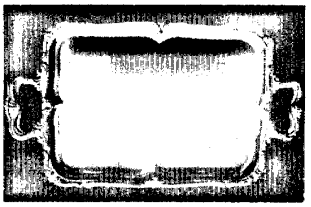
今年は創立二十周年記念ということで数々の記念行事が行なわれてきたが、その一つとして九月十四日から二十三日までキャマス高校との交流、相互理解をより深めるたびに米国研修旅行が行なわれた。参加者は、高校後援会、高校父母の会、高校同窓会、短大後援会、短大同窓会など聖隷学園を支える各団体と学園教職員から広く募られ、二十名が参加した。出発前夜には壮行会が行なわれた。創立二十周年記念事業実行委員が中心になり参加者を送り出した。壮行会冒頭、「参加者一人一人が国際親善の使命を負っている」との理事長の言葉があり、全員がそれに答えるべく、出発の決意を発表した。

一行は九月十四日に出発して初めの四日間はサンフランシスコに二泊、リノに二泊した。前半のこの四日間は観光の要素がふんだんに盛りこまれ、数々の名所を訪れアメリカの大自然に触れそのスケールの大きさに参加者全員が驚嘆の声につつまれていた。後半の四日間は今回の一番の目的であるキャマス訪問にあてられた。ポートランド空港で温かい歓迎を受けた後、期待と不安を胸におのおのホームステイの運びとなった。各ホームステイでは、羊毛加工工場や製紙工場を訪れたり、中学生のアメリカンフットボールの試合や女子大学生のラグビーの試合を観覧したり、学校の授業に参加させてくれたり或いは大自然の中でのんびり過ごさせてくれたりと思い思いに歓待して下さった。ホームステイを引き受けて下さった方々は皆、本当に親切であり、言葉の面では苦労した方が多かったようではあるが、こちらが心を開いて接することで言葉では つくせないコミュニケーションを持てたという感想をもらす人がほとんどであった。キャマスにおいて、不安と期待のうちに参加者が精いっぱい、体当たりで過ごしてきたことは、単にホストとゲストの関係にとどまることなく、聖隷学園とキャマス高校の交流そのものであり、さらには日本とアメリカとの国際親善であったといえよう。また、今回の研修旅行は、聖隷学園の外郭団体や短大生から参加者を多く得、学園における交流の輪が一層広がったこと、創立二十周年を期して行なわれたことで将来の国際交流活動がさらに進展していく可能性が広がったことは非常に大きな成果であった。

キャマスを去る際、ポートランド空港では、見送りに来たキャマスの誰一人として「GOOD-BY」を口にはしなかった。皆、別れの言葉は「see you again」であった。今回の交流で得た友情の絆をより固いものにし、継続していくうえでこの言葉のもつ意味は非常に大きく、確実に来年以降、或いは次の世代へも引き継がれていくことを願うばかりである。

☆米国研修旅行参加者

高校後援会・藤田雅治、高倉政彦
大久保良利、初瀬律子、**高校父母の会**・花嶋一夫、堀美春美、**高校同窓会**・稲垣貴之、村松いずみ、藤田ますみ、**短大同窓会**・中内志保子、名倉洋介、北村洋子、平松初美、**短大生**・高橋かおり、佐藤倫子、川崎里絵、**職員他**・浅井昭裕、津久井十、佐藤稜、長谷川米子



キャマスから寄贈された記念のトレー

聖句

イエスは……巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。

（マタイ四・二三）

発行所
学校法人
聖隷学園
浜松市三方原3453
Tel(0534)36-5311
郵便番号433
発行者
長谷川了
責任者

二十周年記念事業 総合運動場の竣工成る

野球部 サッカー部 式典後招待試合行う

諸事情により若干着工が遅くなったものの七月中旬着工以来、三ケ月余、念願の総合運動場が完成した。十月二十六日には、市内の学校関係者、教職員、高校父母の会、高校後援会、野球部・サッカー部関係者及び施工にあたった三井建設㈱の関係者など二百名余の参列者のもと、竣工式が行われた。

総面積一万二千㎡ ナイター設備を完備した運動場は主に野球部とサッカー部の練習に使用される。

総合運動場は創立二十周年記念事業の一環として、昨年来、土地の確保から始めて準備を進めてきたものである。関係者の熱意と努力により、当初の構想よりもはるかに立派な運動場が完成した。現在一部変形部分があるが来年度の二期工事後には野球場としては、両翼九十m、センター百二十mの広さとなり、県内でも屈指のグランドとなる。

竣工式当日は式典後、記念招待試合が行なわれた。サッカー部は浜松商業高校と、野球部は浜松北高校とそれぞれ熱戦をくりひろげ総合運動場使用の幕明けにふさわしい試合が行われた。

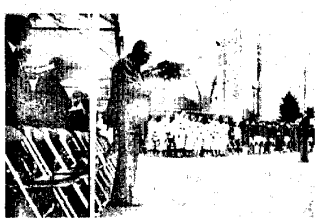
〔試合結果〕

□サッカー

浜松商（前1－2後0－1）3聖隷

□野球

浜松北 0 1 1 0 2 0 1 1 1 7
聖隷㈱宮下（時間切引分け） 1 1 1 0 0 0 1 0 3 7



厳かに行なわれた竣工式

公開講座開く 家庭看護に熱入る

去る六月六日から七月四日までの毎週木曜日、計五回延十時間にわたって公開講座「家庭看護」が行なわれた。この試みは、聖隷短大における教育・研究の成果を広く社会に公開し、「開かれた短期大学」として地域の方との間に積極的に意見交換の場を設け、あわせて正しい保健衛生知識の普及に寄与する事を目的に開かれたものである。

テーマは「家庭看護」これは現在社会問題となっている寝たきりの老人を抱えた家族の方々に家庭でできるやさしい看護の方法を知ってもらおうというもの。

受講者は二十～五十才代の女性十七名で、現在深刻な問題として家庭内で寝たきりの老人の世話をしている方や、今後の為に役立てたいという方などで、実習形式で行われた講座もおのずと熱の入ったものとなった。

受講者の反応は非常に好評で、技術的なことはもちろんのこと、「身内の者が寝たきりになった時に看病を悩まずにできる。」「余裕を持って病人の気持ちになって看病をできそうだ。」「寝たきりの人に対する思いやりの大切さを理解できた。」など、正しい知識、技術を修得することで、精神的にも余裕を持って看病にあたることができるという声が多かった。

現在、公開講座は各地の大学、短期大学及び高校で盛んに行われるようになってきた。その内容は趣味に関するもの、一般教養の向上に関するものなど多岐にわたっているが、看護短大である本学において開かれる公開講座は、生活の中で避けて通れない病気、けがなど健康に関するものであるところに他とは違った特徴がある。

ビデオで紹介 学園の全貌を撮影

電通のある企画スタッフが編集した本に次のようなことが記されている。（会社のPRは、いわばコマーシャルだから安易で低レベルのものだと決めつけている人がいる……。しかしこれ程難しく高い視点でポイントをつかまえなければならない作業は無い。」学園紹介ビデオプロジェクトのメンバーの人々も、「どのシーンを撮れば、又シナリオをどうすればディフォルメせず正しく簡潔に、しかも印象的にできるか。つきつめて考えると非常に難しい。」と。その難しく、大変な作業を今、行なっている。ビデオパッケージの熊崎監督、中村チーフカメラマン、彼らは朝「聖隷の姿」の撮影の時から、エデンの園から出動する聖隷人になりつつある。

無駄な撮影時間をなくすために事務局総務の影山さんは、スケジュール調整に大わらわ、多くの人の協力を得て、ここにきて次第にペースに乗ってきている。

今回制作する学園紹介用ビデオは、三～四分の学園全体像を紹介している部分と、各施設単位ごとにニーズに合った方法で編集している施設編（各十～十五分）とから成っている。ビデオは募集用、来客用、オリエンテーション用としてフル活用される予定である。（完成は来年の四月頃の予定）

◆プロジェクト委員紹介

（敬称略）

長谷川　了、鈴木鈴松、佐藤　稔、藤野正之、古橋　秀、和田清子、牧田弘子、小森やえ子、清水孝彦、堀口路加、影山恵子

聖書のことば

聖隷学園は学制上は看護学校から始まった。昨年から高校・短大を通して六年を念頭においた看護一貫教育の可能性を模索する専門委員会ができ、少しずつ成果をみている。

キリストの働きが教育、医療福祉、伝道のひろい領域にわたっていることを思えば、聖隷（十字の園を含めて）の諸事業は大切な使命を担っていることになる。

病患や心身障害は、それ自身の苦痛があるだけではなく、病因も分らず、治す方法もないものもあり、しかも新しい病気や障害も次次に生れている。そして難病にかかれば、職場や仲間から疎外されて落後する不安や苦しみが襲ってくる。弱みとして他人には絶対に知られてはならない深刻さがある。これは個人的なものであるから、だれにも言うことをはばかり、ひとりで悶々として苦しむ。医療関係評論家は、統計をもち出して苦しんでいるのはあなただけではありません、と言う。苦悩は統計処理では解決しない。

病患や心身障害に苦しむ人は、なぜこの自分がとくにこんな運命を引受けなければならないのか。絶望とか自殺とか死の思いがらつき、実存的、宗教的な苦悩をも背負わなければならない。病患は先と結びつくため、三つの苦悩が重なるのである。

キリストが心身の病いになぜ深いあわれみの心と眼を向けられたのか、そのわけはここにある。

病気・人生・教育

教授・牧師　西村一之

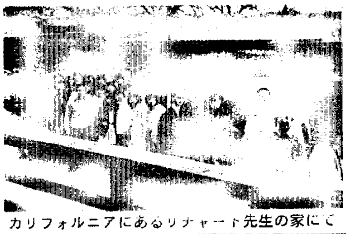
キャンパスは、いま

【聖隷学園高等学校】

国際交流　未来の世界に協同して力を

第四回キャマス生日本訪問団を迎えて

—交流深める親善の輪—



カリフォルニアにあるリチャード先生の家にて

キャマス一行と浜名湖めぐり

第四回姉妹校生日本訪問団を去る七月二五日～八月十一日（十七泊）、キャマス高生二〇名、同行者十一名、団長マリオッテキャマス学校区教育長一行を迎えた。第四回とあって学園としての受入れ体制も整い、研修内容も事前に双方で連絡を密にしていた関係上すこぶるスムーズに運んだ。今後も双方とも人間関係を密にしつつ未来を背負う若者の育成のためにプログラムには細心の注意と配慮をしていきたい。志摩半島、京都研修においては、本校生とキャマス生が共にお風呂に入り、水泳、研修をし、共に畳の上で寝食を共にしたことは、単に人間関係を深めただけでなく、共に協力して未来の世界を手を携えて築いて行くことの出来る同胞として確認し、確信できた場であったように思われる。又キャマス高校から三ケ月間の短期留学生として、ローラ、ダッグ、ミッシェルの三人を迎えた。彼らが私達に交わりを通して残していった友情を今後も大切にしていきたい。

本校からの留学生五名も胸をふくらませてキャマス、シェヘリス、エルマ各高校で現在学んでいる。六一年三月に第六回目の本校生米国研修の準備が着々と進められている。こうして我が学園の国際相互交流の輪は年々拡大する形で進行している。今後増々発展するようご支援下さればさいわいである。

体験入学に　新しい試み

八月七日には、中学生を対象に本校生の国際交流の一端をキャマス高生との交わりを通して直接体験して頂くこと、国際コース生の一ケ年米国留学制度を理解して頂くために体験入学が実施された。

本校近隣の各中学から約八十名が出席、本校講堂でサンドイッチやスイカをつまみながら、和やかな談笑を繰り広げた、最初は戸惑い気味だった中学生もキャマス高生のリードで次第に打ち解けた表情に。自己紹介から趣味、相手の住む国や街の様子を身ぶり手ぶりを交えて熱心に話し合った。僕も私も次回は聖隷の国際コースで英語を学び、自分の意志を英語で伝達したいと早くも意欲を燃している中学生がみられた。十二月には英語の授業の体験入学が企画されている。

県緑化推進委員長賞　学校林が受賞さる

社会の動きが非常にはやく、私たちは何ごとにもインスタント的な思考をする。その中で先輩が手がけ、それを後輩が引き継ぎ、次の後輩にゆずっていく。一つのことをなすとき、多くの者が長い年月をかけてなしとげていくことの重要性を感じている。息の長い地についた仕事の体験は学校林ならではのものである。

もう一つ、私たちの周囲では自然の破壊がすすみ、地球的規模にさえなっている。一人一人に森林に対する認識が問われている時代である。しかし、理論のみ先行していて、体の中にしみ込んでいかないのが現状である。机上のみの知識ではない、実際に体を動かし、汗を流し、肌で感じ、骨肉にしみついた認識をもつ者を育て、そして、何十年も後になって、本物の人間に成長する幻をえがいている。

区分	面積	樹種	林令	成育状況	備考
104林班	3.25 ha	ヒノキ	1年	良	昭和59年3月に12,000本植え付ける
107林班	6.00 ha	ヒノキ		良	昭和60年3月に22,000本植え付ける
未立木地	1.80 ha				昭和61年度に植え付けをする予定
計	11.05 ha				

※ 成育状況について　昭和60年8月現在　104林班のヒノキの平均120cm　107林班のヒノキの平均70cm。(苗木は平均45cmを植え付ける)

※ 生徒は、2年生……ワークキャンプに全員3日間、1日労作として、普通コース4クラスにおいて、クラス単位で年5日実施

3年生……1日労作として、普通コース4クラスにおいて、クラス単位で年5回実施

※ 全教師が生徒と共に植林・下草刈りに参加している。

ホームスティーで　相互理解を深める

—アジア学院生の来園—

アジア学院（栃木県）は日本キリスト教団の奉仕活動の一つとして、アジア、アフリカの人達が日本の文化、産業、技術を学び、各国の研修生同志が学びあう場として設置された。すでに三〇数ケ国、一〇〇〇人以上の人達が一ケ年間の研修を終えて、各々の国で指導者として大活躍をしている。去る、十一月十八日より十五カ国、二六名の方々が学園、福祉事業団等の研修を精力的に行なった。二泊三日のホームスティは父母の会国際交流部と短大生のアジア医療視察団帰国者が中心になり万全の準備をもって迎えて下さった。交流は予想以上に人間味あふれ、お互いに理解が深まり、ホストの心が洗われ、家庭の者が祝福されたとの反省がよせられている。来年度、また奮ってホストとしてご応募下さることを願っている。

長谷川保理事長が研修生に語られた事は、日本もかつて農村社会であり貧困であったが、いかに今日の社会を築き上げて来たかを歴史的に体験談を交えて語られ、貧困と毎月戦っている研修生一人一人に夢と希望と勇気を与えられた。高校生との特別合同礼拝後生徒会長より、全校生の心あたたまる献金がアジア学院の貴重なお働きに感謝して代表者に手渡された。ホストとして学院生をお迎え下さいました皆様には感謝するばかりである。学院生の母国でのお働きの上に豊かな祝福があるよう祈る。

キリスト教教育週間　力に満ちた証言を聞く

高校では今年も十一月十八日から一週間、キリスト教教育週間であった。神の御言葉を土台とする本校では欠くことのできない重要な行事である。

今年は、筋ジストロフィーという難病を患い、確実に忍び寄る死の足音を聞きながら、一日一日を神からのプレゼントとして感謝と讃美をもって生きている難波紘一先生（生命の限りに）をはじめ、宮崎まさ子先生（幼児と共に育つ）、森田恭一郎牧師（説教）、重度障害児のために生涯を捧げている止揚学園の福井達雨先生（生きるって悲しくて楽しいなあ）など力に満ちた証言を聞くことができた。このほかアジア学院留学生との交歓会、映画「アウシュビッツ愛の奇蹟―コルベ神父の生涯―」をも観ることができた。開く耳、見る目さえあれば生徒の心の扉は激しく打たれたにちがいない。

この行事を機会に、本校が固く建学の精神に立ち帰り、聖書の真理に基づく教育を推進して滅びの様相を呈する現代社会に立ち向わなければならない。本校卒業生の中から、御言葉を生きる者が出れば、日本は救われるであろう。

インターアクト年次大会　本校がホスト校で開催

インターアクトとは、ロータリークラブが提唱し、奉仕や国際理解を目的とする青少年育成のクラブである。我校は55年に北ロータリーにより結成された。去る八月十七日、十八日、我校のホストで年次大会が開催された（新居町清風荘）。静岡、山梨の262地区に属する14校が参加。加盟校が一堂に会して、うだるような暑さの中で、名弱の高校生により、「人類の未来を考えて」の壮大なテーマに沿って、講演、分科会の討議、地曳網、キャンプファイヤー等が展開された。大会日程は生徒自身によって運営され、初めての経験であったが、参加者からは「聖高もやるな。」となかなかの好評を得、まさに「青春」を燃焼し、貴重な体験をした二日間であった。

聖隷学園の歴史・補遺（最終回）

—二つの弔辞（その二）—

西村ミサ

前号掲載、福原達三先生を天に送って約半年、福原譲蔵先生の告別式が、ふたたび同じ新しい講堂で行われた。死ということがどんなことかわからないまま、最前列に座を占めていたおおぞらの家の子供達の上に、写真の中から先生の慈眼が注がれているようであった。

福原譲蔵先生告別式弔辞

昭和四十八年三月、奇しき御計（はから）いによりまして、此の地に福原譲蔵先生をお遣わし下さいましたことに私共はどれ程の喜びを感じたことでございましょう。そして今、先生がこの地から天に帰られました事に、限りない悲しみ、失望に沈んでいるものでございます。

先生は、新設された重度心身障害者施設「おおぞらの家」園長として聖隷の地においで下さいましたが、同時に聖隷学園短大の教授の任をも負って下さいました。創設初期何かと学内が雑然と致しておりました頃、菅野先生とともに先生の教授御就任は夜明けにさす一筋の光の様でありました。

キリスト教の人間観に立つ医の倫理を基に、深い学識を豊かな経験に裏付けられた御講義は、本衛生短大の医学看護学教育に確かな基礎を据えるものとなりました。先生は、おおぞらの家の重責を負われつつ、片手間ではすまされない教育の業にその御苦労を割かれました。直立の姿勢でスタスタと学校とおおぞらの家の間をお歩きになっている先生のお姿を、どんなにか尊く拝見したことでしょう。その上当時まだ看護科であった高等学校の外科学の講義までお願いしてしまいました。孫のような生徒を前にして、大学生なら見当もつきますがねえ、と、とまどっておいでになりました。出来ていない答案を一いちていねいに赤インクで訂正して下さり、看護科教師と相談をして処理して下さったり、どんな生徒の中にも可能性を発見して下さった先生の御愛をただありがたく思っておりました。先生が最初御病気になられ御帰京なさいました時、生徒達は色紙に思い思いの言葉を寄せ書きしてお別れに行ったそうです。中には「おじいちゃん早くよくなってまた教えてね」などというのもありました。こんな寄せ書きを先生は大へんお喜び下さって何度も読んでおいでになった、と奥様から伺いました。

先生の愛は人間に対して限りなく深く、それ故に一人一人に即して適切な洞察がなされました。校医として入学志願者の審査にあたられました時、肢体の不自由な小児マヒの子に対して、知能に障害はないはずだから入学させてほしいと特に意見を添えられ、合格の結論を大へん喜んで下さいました。その生徒は三年間その障害を明かるく乗り超え、今社会人として働いております。

思いますれば、どのように愛深く、どのようにお力のおありの先生でも、おおぞらの家の子供達への愛と、それ故にのしかかる重荷を負われつつ、学園の教育にもこのようにおたずさわり下さいますれば、御体に御無理のあった事は当然でございましょう。申し訳ないことをいたしました。

それでも意外に早く御回復、もう一度当地にお戻り下さいました時の嬉しかったことは忘れられません。もう学校はお退きいただきました。しかし先生は、たえず短大、高校の事をお心にかけて下さり、時にははっきりときびしい御忠告も受けました。入学式や卒業式には必ず御出席下さいました。

思いもかけず此度の御病気、ただ驚き、悲しみ、申訳なさで一杯でございました。四月になって御見舞いに上りました時、先生は、「おおぞらの子供も、もっと一人で何かできる様になるまでにしてやらねば私どもの務めが果されません。」とお苦しそうな息の中で話されました。そして「聖隷学園しっかりやって下さいよ。聖隷の卒業生は何処かいいですよ。」とおっしゃって下さいました。「頑張ります。いい働き人をおおぞらに送ります。」と申しあげましたら、かたく手を握って下さいました。あの時の先生の御手のぬくもりが、今もはっきりこの手に残っております。

先生はほんとうに深くおおぞらの子達を愛されました。その純粋な愛は、絶えざる学問研究となり、子供達の療護に対する探究をお続けになっておりました。もしこれらが先生の御手によって集録されましたらおそらく貴重な資料となったことでしょうと残念に思われます。

この先生のお志は、聖隷学園の教育と学問研究の根本精神であることを忘れてはなりません。先生のお志を継いで悲しみを超えて歩んでまいります。天にある先生のおとりなしの祈りがひしひしと感じられます。

聖隷学園教職員、学生生徒一同に代りまして、言いつくし得ない感謝の一端を申し述べて弔辞とさせていただきます。

一九七八年四月二十日

学園は二十年の間にこのお二人の先生の他に、中条しづ、小沢信俊、木俣敏の三先生を天に送っている。このお三人は短大創設時の教授であった。何れもそれぞれに大学教授の永い経験をもちよって聖隷短大の創設時の労苦を負って下さった。学園においては、報いられること少い労を重ねて、中条先生は名誉教授としてこの地で病を養いつつ、他の御二人は辞職後、天に召された。地にあっては空しさと、寂しさとを禁じ得ないが、学生達の心の中に残されたものは生きているであろう。天にあられるうめらぎに思いを馳せつつ感謝の思いをささげたい。

歴史とは人間が地上に生きた生命の集積である。これを大切にすることなしに、新しい歴史の創造に参画することはできない。

この稿を終えて数日を経た日、短大名誉教授高野サツ先生の訃報に接した。先生は短大創設時の看護科長としてその重責を果された。多難であった短大創設期の労を負われた先生方がお四人（よったり）、天に帰られたのである。

【衛生短大】

実習検討会発足　課題と対策を重点に

短大と両病院の連絡密に

看護教育において非常に大きなウエイトを占めている臨床実習を行うに当たって、従来より短大教務委員会と聖隷両病院とで双方の連絡調整を行うため実習協議会が設けられている。この実習協議会の意向をうけ、臨床実習の様々な課題を重点的に話し合うため四月より実習検討会が発足した。実習検討会は聖隷両病院の婦長及び短大教務委員会実習係のメンバーで構成されている。十一月末までに既に九回の会議が開かれ、熱の入った話し合いが持たれている。今回は特に実習検討会にスポットを当てて臨床実習について紹介する。

「看護学」における実習の意義とそのあゆみ

看護学の教科は、理論と実習とによって修得される。どの科学でも理論と実践のない学問はないのだが、看護学の場合は医学教育の一端として生命に関わる科学であるだけに、実習による体験的教育方法は欠くことのできない研究課題である。

看護学は国試要件を要求されるため、カリキュラムは保助看法による養成所指定規則の規制を受けなければならないが、その最低条件は医学的知識に基づく診療の補助機能の実践能力である。それは人間の生命体に対して行う医療を「細胞学的、器官学的、化学的、薬理的」に判断し実践する能力である。しかし人間は単なる「物」ではない。あくまでも個人差を持つ生物心理社会的な全機的生命体である。そこに看護の独特な役割が要求される。つまり単に医学的側面からの業務機能だけではなく看護独自の機能を担っていることである。それは「人間」という全体性を受けて〃み（看）て、まもる（護）〃業務である。簡単に解説すると、

看る＝観察→情報収集→問題点の抽出→必要とされる援助内容の判断

護る＝ケアのあり方（援助）

・予防―保護
・心理的援助
・疾病回復への治療ケア

ということになる。その目標は個人の自立を目的とした「安全と安楽」への技術的提供である。

従って看護の分野は医療機関をはじめ、福祉・救急・地域・家庭と広く展開される。学生にとってはこれらの職場に働くすべての人々が教師となる。その最も基本となるのが病院の臨床実習である。看護婦による実際の業務にかかわっての実習なくして看護教育は成り立たないのである。それだけに実習はパターン化し切れるものではなく、常に実習場と短大との緊密な協議を行いながら進められなければならない。

検討会メンバー，学園小会議室にて

本学は毎年500名の学生を実習させるが、臨床実習のすべてが聖隷両病院の肩にかかっており、受けて立つ看護婦の負担は大きい。今年は実習協議会のもとに、4月から「実習検討会」が開かれた。実習方法の修正を行うのである。同時に保健所実習（地域）では、実習問題解決策の一つとしてVTR製作のためのプロジェクトを発足させ検討を続行している。

それでは、これらのことを踏まえて行なわれる実習の進め方について、その一部の状況を御紹介しながら、看護教育における実習の意義をお報らせしよう。

〈臨床実習の意義と現況〉

看護実践は「成人（老人）・母性・小児」のライフサイクルにもとづく内科的・外科的・精神学的・保健予防学的展開である。

臨床看護とは、文字の如くベッドサイドケアを意味するものであるが即生命の存続に直結した実践科学が行われる。看護教育における実習の基本となるところであり、更には窮極的場面となるところである。実習といえども「間違い」のゆるされない「やりなおし」の利かない場面が展開される。

実習計画は、短大教務委員会実習係によって行われるが、実習場の総婦長を中心とした管理・教育婦長によって構成される実習協議会で、綿密な連絡調整が行なわれながら開始されるのは、実習そのものが看護実践そのものとなるからである。両病院総婦長は、実習生をひき受ける側として、次の様に述べている。

「看護学における臨床実習の意義の一つは看護を学ぶ過程の節々でのそれまでの学びの統合の機会であり、もう一つは自分自身も個性ある人間故に自分らしく看護を展開する機会と、とらえている。このニつは臨床実習によってしか体得できないと確信するので、前者に対しては誤ちを防ぐための指導体制の確立を目指し、具体的には学生を取り巻く全看護職員が自分がどの部分で、学生にかかわるかを承知しているようにと指導している。また後者については出来るだけ多くの先輩ナースの〃個〃に出会えるようにと配慮したい。表面上は以上の二つは相矛盾することから、本音で徹底的に話し合える短大と病院の緊密な連携が不可決なのだと考えている。」

（聖隷浜松病院　高嶋総婦長）

「学内で学んだ知識、技術を手がかりとして、ひとりひとりの患者に応用する過程で実に多くのことに気づく。人間の誕生の感動、死の悲しみ、病気になった時の患者本人および周辺の人々の状況、そして病院で働く職員との協力のあり方等、夜も昼も続けられる患者の「世話」の意味を実感として知ることが出来る場である。

自分が出来ること、出来ないことを知り、出来ないことは学び直し、出来ることはいくらでも広げうることを患者の反応を通して知るよろこびは何にもまして大きい。臨床実習は看護という職業観を体得する出発点ともなるものであり、知識、技術、人間への出合いを知り、それ以後の自分の学習のスタイルがつくられる第一歩と思う。

（聖隷三方原病院　長屋総婦長）

また、四月から発足した「実習検討会」のメンバーである三方原病院管理婦長の安間婦長は、実習生に期待したいこととして、次のように述べている。

「実習生を迎えた時、この学生さんが、将来いつまでも、患者に信頼される看護婦になって欲しいと願っている。しかし、卒業生を迎えた時、あれも知らない、これも出来ないという先輩達の声があるが、卒業時点で問題にするのでなく、実習指導にどの様にかかわるか、真剣に考えることの方が先決なのではないかという意識で実習検討会に参加している。実習しやすい場の提供、知識、技術がより体系づけられるよう、後輩にひき継ぐことができる看護を見せていきたいと考える。

何が、何故、どのようにすればということを核にして看護婦を長く続けられる姿勢、態度を身につけられる実習場であるようにしたい。」と。

このような方々の力強い言葉を軸に、今検討会では、臨床実習の指導要綱作り、それに基づく到達目標、評価基準を明確にすること等を、カリキュラム係と連携を持ちながら取りくんでいる。

私達の願いは、看護の対象となる人々を、ひとりの人間として、その生命の重さを考えられる看護者であって欲しいということである。その為の看護実習のあり方や展開の方法を作りあげていきたい。学内教師間の意見交換はもとより、協議会・検討会で、だされる積極的で前むきな意見を大事に扱い、聖隷短大らしい、実習を生みだしていきたいと考える。

◆実習検討会メンバー（敬称略）

病院側
杉本　民
近藤　千恵子
岩瀬　澄代
安間　富貴子
杉山　仁子
藤原　清恵

短大側
教務委員長　千田サダ子
実習係　早田キヨ、千葉ヒロ子、久保みさほ、堀口直子

聖泉短大近況レポ　地域性を生かし自主独立

彦根は一面雪におおわれる季節を迎えた。学年歴も順序に進行し、六十一年度生の入学試験を迎える。学生の中には、学園祭を契機に自主独立の精神が芽ばえてきている。

今日は一一月一八日、開学式から七ケ月である。この短期間に教職員、学生そして対外関係など、どれをとっても目覚しい躍動が見られる一方、英語など既に第一回のPlateau現象が現れたと報告されている。

教授会はいよいよ esprit de corps が確立されたと申し上げてよいであろう。二五人の日本人が一七の大学で学んでいる上に、開学早々からつまらない雑音に悩まされたりしているのに、最近では寧ろそのために、却って自分たちで頑張らねば、という雰囲気が強くなっているように思う。

事務職の諸君の奮闘ぶりと、殊に各人が自主的精神と協調的態度を美事に調和させている姿は脱帽のほかない。いろいろな人生経験を誇る先生方、中には一度も人の下風に立ったことがないと思われる人たちも含めて、事務職員諸君について非難めいたことを言われた方はゼロである。

学生諸君は伝統も先輩もいない大学にとまどっていたが、開学の第一回生であるという自覚が進むにつれて、いよいよ活躍しはじめた。十一月はじめの学園祭など全く自主独立で大成功をおさめている。

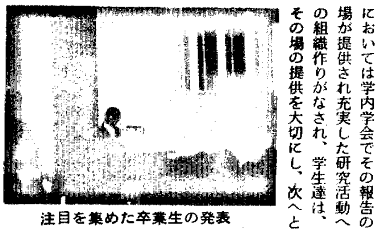
ところで開学半年の経験は、この大学が地域の大学であり、地域を離れてあり得ないことを教えてくれた。しかも浜松のように半世紀を超える輝やかしい社会奉仕の実績という後押しもない。地域問題研究所・地域問題研究会は地域の大学として本学が生き残り得るか否かを決する鍵となるであろう。奮闘あるのみである。

なごやかな語らいのひととき

【専攻科】

母性衛生学術集会　卒業と共に参加

専攻科卒業生と共に年に一回開催される母性衛生学会学術集会に参加できること四度目。一年間の課程での学び、その中で身近なものへの関心、疑問より発した母子保健研究。卒業後、有志の参加を得、継続的に研鑚を繰り返し発表の機会を得る。この学会は母性保健に携さわる専門分野の人々によって構成され、合せて全国助産婦学校学生に特別会員として学会参加への配慮がなされている。本学においては学内学会でその報告の場が提供され充実した研究活動への組織作りがなされ、学生達は、その場の提供を大切にし、次へと歩み出してゆく。卒業生達は初めての学会参加の中、緊張で過ごす日々、母性衛生に関わる多くの研究報告を通して自己の職業への反省と専門性を導びくための〃少し努力してみることの勇気と姿勢〃を省みる良い機会となることであろう。



注目を集めた卒業生の発表

【ヘルパー学園】

学園振興プロジェクト　福祉医療ヘルパーを強化

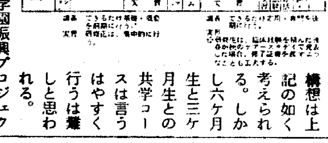
昭和60年度の福祉医療ヘルパー学園の事業計画は三つの目標に向って努力してきた。一と二はほぼ達成されたといえるが、第三の目標である学園入学生の定員の充足これは開校以来の課題であるが、行政や社会の認識度とのかかわりがあり、単なるPR不足であると簡単に片付けられない問題である。

第二の課題は静岡県より「昭和六十一年度秋期に、研修生十名を本学園に派遣したい。但し三ケ月しか受講できない。」という条件で依託してきていることである。

振興プロジェクトの対策

I　学園案内を刷新しヘルパー学園の紹介と募集要項を合わせたパンフレットの作成。①高校卒業生にもプロヘルパーとは何かが解る内容とする。②本学園の特色を明確に打ち出す。③進路先、就職状況を明確に知らせる。④発送先を充分に研究する。

II　三ケ月研修生と六ケ月のヘルパー生の双方の条件を満たしかつ教育の質を下げないでカリキュラムを編成できるか。（同じ教員数で）



構想は上記の如く考えられる。しかし六ケ月生と三ケ月生との共学コースは言うはやすく行うは難しと思われる。

III　ヘルパー学園振興プロジェクトの夢、現実問題として保母養成の短大卒業生が就職難のため寮母として福祉施設に就職して来ている。今後ヘルパー学園が生きのびるためには聖隷短大の一学科として福祉ヘルパー科（仮称）として短大教育にまで昇格し、第二衛生看護学科の定員減の対策とする、というような夢を見ているが、現実的な危機を感じさせられる夢である。

広がる看護の目

短大にはナマステの会というサークルがある。「他者の問題を自分の問題としてとらえつつ自分の生き方を試行錯誤しつつ励ましあいながら模索していこう、良き隣人となろう。」を合言葉に医療活動、ボランティア活動など様々な方面で積極的な活動をしている。今回はメンバーの一人のJOCSのセミナー参加報告を紹介する。

JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）海外メディカルワーカー育成セミナーに参加して
〜海外から日本をふりかえって〜

I科二年　入江　拓

小学校で折り紙や簡単な日本語を教えながら過したネパールでの一カ月の生活や、そこでの人との交わりをふり返ってみて何よりも考えさせられたのは、日本人の忙がしさとそれに伴う精神的余裕の少なさについてでした。ネパールの大多数の人々が日々の糧を得る為に忙がしいのに対して、日本人のそれは明らかに異質です。食べるには困らないけれど、精神的余裕が少ないので、何か大切な物を見失いがちになっているのではと漠然とした不安感を抱きながらも、その背後にある現実と向き合うことを無意識に先に延ばし、さらにはその不安感を意識すらしなくなりつつある日本人。「ちょっと待てよ？」と素朴に疑問を持つ人なら誰でも立ち止って考える余裕が欲しくなるはずなのに、それさえ許さないくらいにスピードアップし、複雑化し、物が溢れ、肥大化してゆく日本の社会。その日本を外からみることで、それまでの漠然とした不安感がはっきりとした恐怖感に変るのを感じました。それどころか、日本のみならず、人類全体が何か目に見えない強大な力でよくない方向に流されている様で、その流れの速さに、もはや精神的に追いつけなくなりつつある日本が「先進国の一つ」とされている現実を思う時、儀友恵先生が「心の貧しさと生活の貧しさ」という短大の礼拝説教で話された言葉を思わずにはいられません。「日本は信仰生活を送るにはハードな国ではないか。」彼女のこの言葉が真実味を持って迫ってきます。

入試方法を変更

推薦入学の基準引き上げ

社会人入試制度も新設

61年度

衛生短大における入学試験の方法について従来より見直しが叫ばれ、検討されてきたが六十一年度生入学試験から以下の点が変更となった。

変更の骨子は、第一衛生看護学科志願者については意欲（人物）と基礎学力の向上を選抜の基準とし、聖隷高校からの志願者のためには一貫教育を推進し積極的な工夫、努力がなされていること。第二衛生看護学科については看護の現場で働いている現役の社会人にも進学の道を広く開いていることである。

具体的な変更点として

☆推薦入学について

第一衛生看護学科では学業成績評定平均値の平均が従来B段階以上であった基準が四・〇以上に引き上げられ、試験科目が作文、数学Ⅰ、面接であったものが小論文と面接のみとなったこと。

第二衛生看護学科においては、従来の推薦入学制度とあわせて、社会人入学制度を設けたこと。試験科目では作文、数学Ⅰ、面接であったものが小論文と面接とになったことである。社会人入学制度は二十五才以上の者で、准看護婦（士）の経験が三年以上あり、所属長の推薦のある者が条件となっている。

☆一般入学について

第一衛生看護学科においては、従来、作文、数学Ⅰ、国語Ⅰと生物・物理・化学より一科目選択、面接であったものが新たに英語Ⅰ Ⅱを加え、作文が小論文に、国語Ⅰが国語Ⅰ・Ⅱになり、理科の選択科目は物理がなくなり生物・化学から一科目選択になったことである。

第二衛生看護学科においては、従来、作文、数学Ⅰ、国語Ⅰ、基礎看護医学（看護一般）、面接であったものが、数学Ⅰがなくなり、作文が小論文に、看護の専門科目として看護基礎医学、基礎看護、成人・母子看護の三科目が設けられたことである。

以上が六十一年度生入学試験における変更点の概略である。

61年度から高校定員増

十六才人口ピークの昭和六十四年には総定員八八二名

高校は昭和六十一年度から定員増される。従来一学年定員二百七十名、六学級であったが、二百九十四名、七学級となる。本校はコース制を採用しているが、定員増にともない、コース編成も、国際コース一学級、進学コース二学級、普通コース四学級となる。昭和六十一年度中学校卒業生数が静岡県西部地区で、六十年度にくらべ、約七百名増加する。そして昭和六十四年には中学校卒業生数がピークに達する。公立高校の新設はなく、西部地区中学校進路対策協議会は、西部地区私学に対して、学級増もしくは学級定員増をすることによって、できるだけ多くの中学校卒業生が、高校進学のできるよう要請している。これに応えて本校は二十四名の定員増をすることになったものである。わずか二十四名の定員増であるが、不幸な中学校浪人を救う一助となればさいわいである。

短大生の下宿数を調査

全体の七〇％以上が自宅外通学

かつて、短大にも寮がありました。彼等はどんなところで生活をしているのでしょうか。

新入生に、合格証といっしょに送られる寄宿の中に下宿一覧表が入っています。現在このリストに入っている下宿は二十軒、三百数十名分の部屋があります。このうち十三軒については、入居者がすべて聖隷短大生で、大家さんが隣接して居住しており、一定の規則のもとで寮に準じた運営がされています。残りの七軒についても、いわゆる下宿やアパートの形態ではありますが、数名ずつの短大生が生活しています。

この二十軒の下宿（寮）が他の下宿やアパートと違うところは、大家さんと学校との協力体制の有無です。十数年の歴史を誇るところから、昨年新築したところまでさまざまですが、年一回の大家さんと学校側との懇談会をはじめ、おりにふれての学校からの訪問や大家さんから学校への相談等、密接な連携がなされており、現在これらの下宿（寮）に居住する学生は二百七十余名です。

キリスト教を土台とした看護教育を行う短大として、北海道から沖縄まで今回から多数の学生が本学に学んでいることを考えるとき、彼等自身が看護者として、知識だけでなく人格的にもより良い成長が出来る場として、また御両親が安心して彼等を送り出せるよう、生活の場としての下宿（寮）については、今後ますます大家さんとの連携を深めたいと思います。

教職員人事

（昭和六十年七月～昭和六十年十二月）

□退職　ご苦労さまでした。

高校
安藤博光　教諭（英語科）　八月三十一日付
事務局
鈴木良見　教育事務課長　七月三十一日付

□弔慰　心からお悔み申し上げます。

高野　サツ（初代衛生看護科長）　十一月二十九日

学園のスケジュール

（　）は日

	11月	12月	1月	2月	3月
法人	・理事会・評議員会	・教職員冬期研修会(27) ・冬季休業(28～1／7)	・仕事始め（8）		・理事会・評議員会（29）
高校	・キリスト教教育週間（18～22, 28）	・国際コース体験入学（14） ・期末試験（13～16） ・クリスマス礼拝（21） ・終業礼拝（23） ・冬季休業（24～1／7）	・始業礼拝（8） ・企業見学会（普コース・2年）(23) ・卒業テスト(30～2／1) ・推薦入学願書受付(28～31)	・卒業式（15） ・一般入試願書受付（7～12） ・入学試験(18, 19)（合格発表(21)）	・学年末試験（7～10） ・球技大会（14） ・終業礼拝（20） ・新入生オリエンテーション（24）
聖隷短大	・推薦入学願書受付（1～15）	・推薦入試（4）（合格発表(14)） ・クリスマス礼拝（21） ・冬季休業（23～1／7）	・専攻科願書受付(11～30) ・後期試験(31～2／8)	・一般入試願書受付(1～20) ・専攻科入試(6)(合格発表(15)) ・専攻科2次募集願書受付(1～20) ・総合試験（7～8） ・追・再試験(24～27)	・看護婦(士)国家試験(2) ・助産婦国家試験（4） ・入学試験(6, 7)(合格発表(15) ・専攻科2次試験(6)(合格発表(15)) ・卒業式（11）
ヘルパー学園				・願書受付（1～3／10）	・ケアスタディ発表会(10) ・修了式（12） ・入学試験(18)（合格発表(22)）
聖泉短大	・学園祭（2～4） ・推薦入学願書受付（18～12／2） ・地域問題研究所発会式（4）	・推薦入試(4)（合格発表(7)） ・燭火礼拝（19） ・冬季休業(23～1／7)	・後期試験（13～18） ・レビュー期間(20～25) ・後期授業終了（25） ・一般入学願書受付(14～28)（一次） ・一般入試(30)（合格発表(2／4)）	・一般入試二次募集願書受付（14～28） ・追試験（10） ・再試験（20）	・一般入試二次試験(2)（合格発表5） ・春季休業（22～4／7）

創立20周年記念事業寄付者一覧

創立二十周年記念事業に対しまして多くの方々より御寄付頂きました。御寄付をいただいた在校生父兄の皆様、同窓生の皆様、就職先企業・病院・取引業者の皆様、教職員の皆様に心から御礼を申しあげます。記念事業も全て予定通り終え、今回の創立二十周年記念事業を期に聖隷学園の歩みと現在の姿、さらに将来に向けてますます飛躍していく姿を内外に知らせることができました。この記念事業も皆様のご協力にささえられてのものと思います。今後とも皆様方のますますの御協力をいただきます様よろしくお願い申し上げます。

以下に昭和六十年六月一五日以降に御寄付いただいた方の氏名を掲載させていただきます。

短大同窓会
Ⅰ科　前田より子　殿・名倉　洋介　殿
Ⅱ科　渡辺　芳子　殿
寺田　清子　殿・千葉　育代　殿
清水　澄子　殿

☆寄付金総額　一、八五二名　六五七、八五〇円
（昭和六十年十二月四日／）

昭和61年度生募集

【聖隷学園浜松衛生短期大学】

❖第一衛生看護学科（3年制）100名，男女共学
受験資格：高等学校卒業（見込）

❖第二衛生看護学科（2年制）100名，男女共学
受験資格：准看護婦で高等学校卒業者
高等学校衛生看護科卒業（見込）者で准看護婦の有資格者

		推薦試験	一般入学試験
願書受付		昭和60年11月1日(金)～11月15日(金)	昭和61年2月1日(土)～2月20日(木)
試験日		昭和60年12月4日(水)	昭和61年3月6日(木)・7日(金)
合格発表		昭和60年12月14日(土)正午	昭和61年3月15日(土)正午
第一科衛生看護学科	出願資格	①人物が優れ，健康であり，学業成績評定平均値の平均4.0以上の者 ②高等学校において，生物・化学・物理のいずれかを履修していること。	高等学校卒業者（見込含む） 看護婦（士）志願者，年令制限なし
	試験科目	1. 小論文 2. 面接	1. 小論文 2. 面接 3. 国語Ⅰ・Ⅱ（古典，漢文除く） 4. 英語Ⅰ・Ⅱ 5. 数学Ⅰ 6. 理科（生物，化学より1科目）
第二科衛生看護学科	出願資格	①人物が優れ，健康であり，学業成績評定平均値中等以上の者 ②高等学校において，生物・化学・物理のいずれかを履修していること。	准看護婦で高等学校卒業者 高等学校衛生看護科卒業（見込）者で准看護婦の有資格者
	試験科目	1. 小論文 2. 面接	1. 小論文 2. 面接 3. 国語Ⅰ・Ⅱ（古典，漢文除く） 4. 看護基礎医学 5. 基礎看護 6. 成人・母子看護

※第Ⅱ衛生看護学科 社会人入学出願資格　1. 25才以上の者
2. 准看護婦（士）の経験5年以上の者
3. 所属長の推薦がある者

❖専攻科（助産学特別専攻）（1年制）
（15名）（女子のみ）
出願資格
短期大学・大学の看護関係学科卒業（見込）者

項目	一次募集	二次募集
願書受付期間	昭和61年 1月11日(土)～1月30日(木)	昭和61年 2月1日(土)～2月20日(木)
試験日	昭和61年2月6日(木)	昭和61年3月6日(木)
試験科目	小論文，面接，母性看護，小児看護	
合格発表	昭和61年 2月15日(土)正午	昭和61年 3月15日(土)正午

【福祉医療ヘルパー学園】

よきヘルパーとして隣人と共に生きる人材の育成を目的とする。
＊春季コース（昭和61年4月～9月）
募集定員20名　男女共学
入学資格：高等学校卒業（見込），その他学歴，年令，性別にかかわらず，学園長が適当と認めたもの

	春季コース・入学試験
願書受付期間	2月1日(土)～3月10日(月)）
試験日	3月18日(火)
試験科目	1. 作文 2. 面接
合格発表	3月22日（土）

【聖隷学園高等学校】

募集人員　普通科294名　男女共学

願書受付	推薦入学	昭和61年1月28日(火)～1月31日(金)
	試験入学	昭和61年2月7日(金)～2月12日(水)
試験科目		（推薦入学，試験入学問わず）国語，数学，英語
試験日	学力試験	昭和61年2月18日(火)
	面接試験	昭和61年2月18日(火)・19日(木)
合格発表		昭和61年2月21日(金) 正午以降
入学手続		昭和61年2月24日(月)・25日(火)

【聖隷学園聖泉短期大学】

商経科100名　男女共学
英語科100名　男女共学

	推薦入学	一般入試 一次試験	一般入試 二次試験
出願期間	昭和60年 11月18日(月)～12月2日(月)	昭和61年 1月14日(火)～1月28日(火)	昭和61年 2月14日(金)～2月28日(金)
試験日	昭和60年 12月4日(水)	昭和61年 1月30日(木)	昭和61年 3月2日(日)
試験科目	小論文・面接	国語Ⅰ（現代国語），小論文，面接 英語Ⅰ・Ⅱ（商経科専願者は簿記Ⅰをもって代えることができる）	
合格発表	昭和60年 12月7日(土) 正午	昭和61年 2月4日(火) PM3：00	昭和61年 3月5日(水) PM3：00